氏　　名	松三　明宏
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　6564　号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科　病態制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Effectiveness, safety, and factors associated with the clinical success of endoscopic biliary drainage for patients with hepatocellular carcinoma: a retrospective multicenter study （肝細胞癌患者に対する内視鏡的ドレナージの有用性，安全性，臨床的成功の関連因子について：多施設後ろ向き研究）
論文審査委員	教授 豊岡伸一　　教授 八木孝仁　　准教授 楳田祐三

学位論文内容の要旨

肝細胞癌(HCC)による黄疸や肝障害に対する成績、予後に関する報告は少ない。今回我々は岡山大学病院を含む 11 施設にて行われた HCC による閉塞性黄疸、もしくは胆管炎に対する EBD(内視鏡的ドレナージ)症例を後方視的に検討した。

患者数 107 名、年齢中央値 71.5 歳、男性 76 名(71%)であった。手技的成功率は 98%、臨床的成功率は 79%であった。合併症は、3 例(2.8%)に認めた。Child-Pugh C(OR 2.85, P=0.047)が、独立した臨床的不成功に関連する因子ということがわかった。臨床的成功を得られた症例は、不成功に比べて予後が延長することがわかった(Clinical success 5.0 months vs. Clinical failure 0.93 months; HR 3.2, 95% CI 1.87–5.37)。 EBD 後の予後に関連する因子の検討では、門脈塞栓がない症例(HR 0.52, P=0.038), ERCP 後に HCC 治療が継続できた症例(HR 0.39, P=0.0015)、臨床的成功例(HR 0.39, P=0.0018)が独立した因子であった。

Child-Pugh C は、HCC 患者における内視鏡的胆道ドレナージの有効性を考える重要な術前因子であった。臨床的成功を得られれば予後の改善が期待できるため、積極的に胆道ドレナージを検討するべきであると考える。

論文審査結果の要旨

肝細胞癌（HCC）による閉塞性黄疸、もしくは胆管炎を伴う患者に対して EBD(内視鏡的ドレナージ)による恩恵と関連する臨床因子については不明である。この因子が明らかになれば EBD を行うべき患者を選択することが可能となる。

本研究では HCC による閉塞性黄疸、もしくは胆管炎を伴う患者に対して EBD を施行した 107 例のデータを集積し、検討を行った。Child-Pugh C が独立した臨床的不成功に関連する因子ということが判明した。EBD 後の予後に関連する因子の検討では、門脈塞栓がない症例、ERCP 後に HCC 治療が継続できた症例、臨床的成功例が独立した因子であることが判明した。

委員からは肝予備能力との関連に関する質問があり、今後の検討の余地も含めて質疑応答がなされ、申請者の十分な理解度を窺い知ることができた。

本研究は閉塞性黄疸、もしくは胆管炎を伴う HCC 患者に対する EBD の適応に関する重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。